◆重点普及課題

深海性タチウオの資源管理について

金　城　武　光

1．目的

平成5年から本格的に漁獲が始まった深海性のタチウオは、本土市場で高値で扱われていることから、操業船が増え急速な漁獲圧力による資源の減少により、現在では少数の漁船が出漁しているにすぎない。このため、資源管理をめざした基礎調査を実施し、安定した漁業生産活動を図る必要がある。

2．生態

水産試験場の調査によると、深海性のタチウオの分布は、水深300～400mにみられ、沖縄本島での主漁場は中部西方海域で、東方海域の安田沖にも好漁場がみられるようである。

産卵は、8～12月にみられ、一部春にも産卵するようである。食性は魚類主体にエビ類、イカ類、タチウオどうしの共食いや浅海性のフエダイ類、表層性のトビウオも出現する。食性からすると、かなり大幅な深浅移動をするようである。

3．操業の現状

名護漁協

ソデイカ漁が終了した7月から約1ヶ月間だけ出漁、例年5隻程度が出漁しているが、今年は出漁船がいなかった。

国頭漁協

今年は2隻が6月から安田沖へ出漁、盛期は7～9月であるが与論島の漁船が多い。

具志川支所

ソデイカ禁漁期間中の7～10月に1隻が出漁している。

那覇沿岸漁協

11～5月に10隻程が間隔をおいて出漁しているが魚体が小型で値段も安い。

読谷漁協

1隻が11～5月に漁場探索をしながら年中操業している。他は4隻程が11～5月に日帰り操業をしている。

浦添宜野湾漁協

8月～11月に2隻程度が出漁、最盛期は10～15隻程操業していたが、ほとんどソデイカ漁に切り替えこれ以上増えるみこみはない。

4．残されている問題点

水産試験場が平成5年度から5カ年間継続調査を行ってきた結果、いくつかの好漁場の発見もあったが、現在では乱獲等のため、すでにその価値を失っている。時間はかかるだろうが、今後資源が回復に向かった場合の漁業管理等にむけての取り組み、検討が必要である。